

靈的ないしスピリチュアルということについて

豊 田 剛

靈というものが実在すると考える人がたくさんいるらしい。それをテーマにしたテレビ番組まであるくらいだから、それに関心を持つ人が少なくないことは確かである。靈とか靈的という表現もよく使用されるが、さすがにこれは多少おどろおどろしい感を否めない。そこでスピリチュアルというソフトな表現の方が好ましいということなのか、近年よく見かけるようになった。スピリチュアル・カウンセラーなる職業まであるとのことである。何でも横文字にしたり、原語のままの発音をカタカナ書きにすることの好きな国民性とみえて、日本でのカタカナ語の氾濫は少々度を越したものの印象は拭いようがない。それはその方がかっこよく感じられるという要因も当然無視できないのであるが、それ以上に、何かずっと立派なことが表現されているかのような錯覚を与えるという効果もあるらしい。実体はたいしたこともないのに、カタカナ語でいうと何かハイカラなすごいことを言っているかのように思わされてしまうのである。ひどい場合は内容の中味のなさ（空疎）をカムフラージュするための巧妙な手段として利用されることも珍しくない。それはその表現を使う側にも、またそれを読む側にも共通する心理であるようだ。スピリチュアルにもその気味があるのではないかとの疑いを禁じえない。

それはともかく「スピリチュアル」は現在ではかなり広範囲に言及される言葉になっている。特に心理、医療、福祉といった広い分野での使用が目にとまる。

それについては後に論じるとして、我々の語感では、靈、靈魂、魂、スピリットやスピリチュアルは類縁関係にある言葉であり、類似の意味を含みながらも、どうもニュアンスに違いがある。しかもそれも人によって受け取り方に差があるようなので更にやっかいである。従ってそれらを相互に交換可能な同

義の言葉として使うことはできない。さりとてそれらを正確に概念規定し区別をはっきりさせることも困難である。そのためどうしても厳密さを欠く議論になったり曖昧な部分が生じる恐れを否定できないのである。そのことをあらかじめおことわりしておく。

ただ一点確実に言えるのは、これらの概念の根底にあるのが「死」の問題であるということである。「人間というものは、オギャアと生まれたときから一步一步死に向って歩いていく旅人みたいなもの」(小林秀雄)である。人間はどこから来て、どこに行くのか。人は死んだらどうなるのか。死後の世界、天国や地獄はあるのか。肉体が亡んでも靈魂は残るのか。こういったことを昔から人々は様々に考えてきた。死と太陽はじっと見つめていられないという名言がある。人は「死」を恐れる。死ぬことなど楽しい話題である筈もなく、生まれたからには必ず「死」が運命づけられているのに、それを考えることを避けようとする。そんなものはないかのように、あってもずっと先のことだと自分に言いきかせてその話題から逃げる。タブー視して触れないようにする。そうしてごまかして見ぬふりをして、不安から解放されるわけではない。だからこそ「memento mori」などという警告に接すると身につまされたりすることがあるのだ。日頃から死についてもっとしっかり考えておく必要がある。エピクロス¹⁾はあらゆる恐怖を悪と考えたが、中でも「死の恐怖」を最大の悪と考え、心が平安であるためにはどうしてもそれから解放される必要があると説いた。正にその通りである。

こうみえてくると霊といったものの想定は「死」の問題に対する一つの対処法であることがわかる。仮に「死」というものがなければ人間は霊のことなど考えもしなかったであろう。

あらかじめ筆者の立場を表明しておけば、「霊」といったものが実在するとは考えない。「神」と同様、「霊」や「靈魂」は人間の思考や想像力の産物にすぎないと思う。神が人間を創るのではなく、人間が神を創るのである。人間の頭が神という観念をでっちあげると全く同様に、霊というものも創作されるのである。霊というものは人間の身体から独立に存在しうるものではなく、

幽霊と同様全くの Gedankending であるとみる。デモクリトスやエピクロスが考えたように、人間が死ぬと身体を構成している原子はバラバラに散逸してしまうので、それとは独立に靈魂のようなものが残ることはありえないと考える。人間は死ぬと元の無に帰るだけである。ただ人間を構成している分子は何らかの形で他の生物の構成要素となったりはするだろうから、人間も含めて自然全体が大きな循環のうちにあるとはいえると思う。これはごく自然な見方ではあるまいか。

しかし多くの人はそんな冷めた夢もロマンもない見方を受け入れたくないから、肉体の死後も靈魂は残ると考えたりするのであろう。先祖供養や墓参りなどの行事をみると、靈のようなものの存在が想定されているのではないかという気になる。

先述の靈など実在しないとする立場からすると、なぜそういうふうを考える人が少なからずいるのか、という点が気にかかる。そういう人たちにとって靈はどんなふうに使われているのだろうか。靈といったものに関する考え方の基本構造はどのようなものか。この概念の成立はどんな歴史の変遷を経てきたものなのだろうか。そんなものがどうして実在していると信じられるのだろうか。またこういう考え方が社会に対してどういう影響を及ぼすのか、また及ぼしてきたのか。またその論理のカラクリはどうなっているのか。こういった諸点について、十分とはいえないが、いくらか考えてみようというのが、このささやかな論稿の狙いである。

平安時代、安倍晴明などの陰陽師たちが、死霊、生霊といったいわゆる「物の怪」のお祓いなどに大活躍して、神と人を媒介する超能力者としてあがめられていたことは、「今昔物語」などにもとりあげられ、よく知られている。昔ならともかく、さすがに現代のように科学技術文明の発達した時代に、そういう類いのことはあるまいと思うのが普通だが、実際には靈にまつわる問題はいくらかでもあるというのが現実である。それを示すため、「心霊ブーム」などといわれる現代の具体的事例をあげてみよう。未だに世間をさわがすことのある

「靈感商法」や「霊視商法」のカモになる人があとをたたない。更に「心霊治療」なるものまである。フィリピンに有名な心霊術師がいるといわれ、その弟子と称する日本人が岐阜県で「心霊手術」を施し逮捕される²⁾という事件も起っている。これらは明らかに霊の存在を信じるのがなければ生じえない事柄である。なぜこれほどまで霊の存在を信じる人がいるのであろうか。そういう人が「霊とは何か」を厳密に考えぬいた上で信じているのかといえば、勿論そんなことはない。ただなんとなく信じているようなのである。「どうしてそんなものがあると信じられるのか」という問は、そういう人には浮かばないらしい。「なぜそんなものがあるとわかるのか」という問も同様である。しっかりとものを考える力がもう少しあれば、「靈感商法」のような見えすいたインチキ商売で金を巻きあげられることも減るだろうにと残念に思えてならない。「靈感商法」のパターンなどごくありふれたもので、こんなものにひっかかる人がいるのが不思議なぐらいである。先祖や水子、変死者等の霊が成仏していないので禍いをもたらしていると称して、その霊障を早く除去しないと大変なことになると脅し多額の金銭をみつがせるといったケースが大半である。こういう場合つけこまれることになる弱点は欺される当事者の「不幸」である。それは仕事や商売の不調、病気、家庭不和、子供の非行等いろいろである。そしてどうしてこんなことになるのかと悩み、安易な解決を求め、あげくコロリとだまされて、飛んで火に入る夏の虫となるのである。原因など複雑にからみあっていて、簡単にわかる筈もないことなのに、単純明快にはっきりと「それは霊のせいだ」と断定されると、疑うことも知らずやすやすとそれを信じてしまうのである。

もっとも霊の問題は「靈感商法」のような卑近な例に限られるものではなく、宗教の持つ基本的問題と大きく重なるような広い射程を持つものであることはいままでもない。ただこういう具体的な事例からも我々が考えるべきことについてのヒントは十分得られる。この場合欺す側と欺される側に霊の存在という共通理解が前提される。そこで問題は「本当にそんなものが存在しているのか」ということになる。しかしそれをいうならその前に「そもそも霊とはど

んなものか」がはっきりしていなくてはならない。靈なるものの性質もわからないのに、その有無を云々するほどおかしなことはないからである。そこで「靈がどのようなものとして扱われているか」が問われる。先の例では過去に死んだ人の靈が今生きている人間に害をもたらすとされている。一般常識的には、無念な死に方をした者の靈は成仏できず、人間界を彷徨し迷っているの、人間に祟ったりして悪さをするのだということになるらしい。「どうしてそんなことがわかるのか」と思わず半畳の一つも入れてみたくなるが、特別な能力のあるいわゆる「靈能者」にはそれがわかるということのようである。そこで先祖がたたくさんの人を殺したとか、水子の靈がたたっているとかいっただ凡人には確かめようのない事柄が靈視できたと称され、それが今の不幸の原因だというご託宣が下るのである。あとはあなたの対応が悪いからこんなことになっている、何らかの対抗手段をとらないと事態は益々悪くなる一方だと脅しをかけさえすればいい。そこでもちだされる靈が成仏するためのきちんとした供養が、法外な祈祷料だったり高価な壺を買うことだったりするという仕掛けになっている。

このことから一般的な靈理解の特徴がかなり明らかになる。人間は死んで肉体が亡んでも靈は永久に存続すると考えられていること。過去からずっと生き残っている靈は今生きている人間に影響を与える能力があると考えられていること。「低俗靈」などという表現があることからみると、一口に靈といっても善い靈（崇らない靈）と悪い靈（崇る靈）の区別がされているらしいこと。従って一定の手段を講じることによって悪い靈を善い靈に変換することが可能と考えられているらしいこと。柳田国男³⁾が考えたように、祖先の靈は自分たちの家から少し離れた小高い丘にいて我々を見守ってくれているといった「祖霊信仰」も案外日本人の心性のうちに残っているのではないかとも思われる。そこでは死靈に対する恐怖感というよりも、死者の切なる思いは子孫の繁栄を求めているという思想がみられる。

一般的理解からみて、靈はどうも実体的にとらえられている印象が強い。その方が人間の想像力（創造力）に合致して受け入れやすいからであろうか。無

論、理論的に厳密に考察されたり明確な定義が与えられるわけではない。なんとなく曖昧な了解にとどまっている。むしろ霊の概念規定が極めて不明確である点にこそ、この問題の本質があるのではないか。何かよくわからないものだからこそ何とでも論じられる余地があり、人間の願望であれ妄想であれ、ありとあらゆる考え方を許容してしまうところに、この概念のミソがあるというべきであろう。

ただはっきりしているのは、霊が身体（肉体）あるいは物体の対立概念とされることである。少なくとも霊が具体的物的概念ではないとされている点は重要である。『広辞苑』（第五版）⁴⁾でも「霊」（レイ）は「肉体に宿り、または肉体を離れて存在すると考えられる精神的実体。たましい。たま。」となっている。これが呉音で「リョウ」と読む場合は「たましい。特にたたりをするもの。」と説明されていて興味深い。霊は肉体とは全く質を異にする精神的実体とのことだが、そこでただちに「それほど全く異質なもの（物質的なものと非物質的なもの）がどうして結合しうるのか」という素朴な疑問が浮上する。しかしそれは霊を身体や物体よりも高次の上位概念とする立場から、何とでも説明できるという仕組みになっているようである。

語源的探索はその概念の含意をおしはかるのに有効であるばかりか、その歴史的成立事情をも語りうるので、まずそれを済ましておこう。

漢字の「霊」は雨請いをして神の言葉を聞く巫女を意味し、「魂」は死者の身体から立ち上っていく雲気のようなものを表わしているといわれる。このことだけでも「靈魂」が人の身体に宿ってその活動をつかさどる存在と考えられるようになる経緯を推測させるのに十分である。その他の外国語をみると、霊の原語である、ヘブライ語の「ルーアツハ」、ギリシア語の「プネウマ」、「プシュケー」、ラテン語の「アニマ」「スピリトゥス」、サンスクリットの「アートマン」、このいずれもが元々「氣息」、「風」、「空気」といった物理的自然現象を意味する用語であったことが確認され、その示唆するところは重要である。「息をする」つまり「呼吸」がなぜ大事な意味をになう言葉になったのか。

人間にとって「生きる」ということは最大の関心事である。そしてそれは常に「死ぬ」ということと結びついている。生きているものはいずれ必ず死ぬからである。日本語の「生きる」「活きる」が「息」という言葉から出たことは恐らく間違いないだろう。「息をしている」ということがとりもなおさず「生きている」ということだからである。そして「死ぬ」も息(シ)が去(イヌ)がつづまったものではないかとの説があるが、あながちのはずれでもないように思われる。いずれにせよ「生きる」か「死ぬ」かということは、いつの時代にも、またどこでもどんな社会でも、人間にとって一番大事な問題であったことに違いはない。人間が「死ぬ」ということは昔から変わらずあったわけだから、「死」は恐れられたにちがいない。「死」を穢れとして忌むという神道の発想のうちにも「死」への恐れがうかがわれる。昔は平均寿命も短かく、今以上に人間は簡単に死んだであろうから、死が人間にとって身近なものであったことは想像にかたくない。その場合問題は「死をどう確認するか」ということになる。死にかけた人とか半死半生の状態の人が果して生きているのかどうか見きわめる必要がある。もう死んだのかそれともまだ生きているのかをはっきり区別することが求められる。そのためには基準がいる。どういうふうになったら死んだと見做してよいかという基準である。それも特別な技術がないとできないようなものではだめで、誰もが容易にできかつ納得できるようなものでなくてはなるまい。その基準として「息」をしているか否かが使用されたのだろう。これなら誰でも容易にたしかめることができるからである。人間が死んでそのまま放置しておくで腐り、白骨化し、ついには土になること⁵⁾は経験的に十分知られていただろう。腐るまで待てば死の判定は確実だろうが、そうもいくまい。もっと早い段階で決める必要がある。その基準として誰にでもわかる「息をしていない」が使われたものと思われる。現在、死亡診断書を書く資格があるのは医師だけである。脳死のようなややこしい問題が出てきて多少事情がちがってきたとはいうものの、脳死などというのは極めてまれなので、たいていは三徴候で死亡を判定している。つまり息をしていない(呼吸停止)、心拍がない(心臓の拍動停止)、瞳孔散大の三つである。ずっと昔も息をして

いない、心臓の鼓動がない等で人の死を確認してきたものと考えられる。だからこそ「息をすること」がそれほど重要なメルクマールになったのであろう。

以上で霊という観念生成のもとをたどると「息」に行きつくことが確認された。そして「息」の有無で生死を区別していた人間が、その「息」なるものを特別の存在として思い描くようになることは自然な歩みにみえる。人間は身体の中に「空気」や「風」のようなものが宿っていて身体を支配していると考えようになったのではないか。生きている間はそれが身体にとどまっているが、死とともにそれが最後の「息」として出ていってしまうものだと。後に「靈魂」が人間の身体に自由に出入りできるといった見方が生じたのは、睡眠中に見る夢とか一時的に気を失っていて正気に戻るなどの体験から、生きている間にもそれが身体を離れることがあると考えるに至ったからだという説がある。「霊」の問題の進展はそれがもっぱら死者に関わるものである段階から生者にまでその範囲が広がることに示される。始めにあるのは、最後の「息」として人間から出てしまったものはその人の影あるいは亡霊として存在しつづけるとするものである。ホメロスには、人が死ぬと生前と同じ姿をした影となって死体から抜け出し、あの世に行って生気のない暮らしをするという描写がある。つまり死者の魂を幽霊のように考え、それを「プシュケー」と呼ぶのである。そこから対象が生者にまで広がるのは勿論一つの進展であるが、さらなる思考の歩みはそこに人間世界の倫理的善悪という要素が持ちこまれることである。それは善い霊と悪い霊の区別として示される。それは同時に物事の説明原理として「霊」という観念が使用されることである。たとえば途方もない自然現象に出くわす場合、またひどい不幸にみまわれる時、また逆にとてつもない幸せにめぐまれるケース、そういう場合それらの原因を「霊」に帰することで納得し安心することは十分ありうる。悪霊が災いをもたらすのだとすることは、その当否はともかく、一応の説明原理にはなっている。とすればその悪い霊（怨霊）をなんとか静める必要があり、そのための手段としていろいろなことが考案された事情もよく理解できる。

タイラー（1832-1917）が未開社会の観察から、その根本にあるのが靈魂

の観念であるとして所謂アニミズム説を唱えたが、それはプレアミニズム説の批判などによって崩れ去るようなものではあるまい。プレアミニズム説のいかかわしは、それが宗教というものはどんな人間にも認められる感情によって生じる普遍的なものだからとして、その正当化をはかる護教論的イデオロギーの産物である点にある。原初の状態において呪術と宗教をはっきり区別することなどできるはずもない。またそうすべきでもないしそうする必要もない。区別したがるのは宗教を呪術のような低次元のものよりも高次のものとして位置づけたいからだろう。靈魂といった何か得体の知れないものがある、それが人間に大きな力をふるっているとする世界観が成立した事情は、人間心性に生じる一段階としてよく理解できるし、それを低次のものとする理由もない。靈魂なるものについても、後の思弁によって整理、概念化されたようなものではなく、はじめは精霊、妖精、神、呪力などが混在した雑多な神霊信仰であったと考える方が自然である。そして靈魂の観念が神観念の基礎になったという把握方もあながち不当としてしりぞけるにはあたらないのではないか。プレアミニズムのように靈魂観念以前にマナのような超自然的な力の観念を置こうとするのは、靈魂に人格的意味あいを持たせたいからである。しかし非人格的な呪力だけが支配しまだ靈魂観念が発生しない段階を想定するのは、いわば勝手な抽象の産物にすぎない。なぜならどんな未開社会でも、呪力だけが支配していて靈魂観念が欠けているといった例は見られないからである。人格的なものへの崇拜こそ真の宗教だとする片寄った考え方に影響されたのがプレアミニズムの主張であり、そういうことには自戒が必要である。

いずれにせよ、人間が心性の一定の発達段階に至ると「霊」ないし「靈魂」といった観念を創造するものであることは、人類に普遍的にみられる現象とあってよい。そしてこれらの観念は人間の生死という最も根源的な関心事に起源を持つものであることが確認された。

人間の作りだす霊や靈魂といった観念に関し、最も重要な論点は単純素朴な「そんなものが果して実在するのか」という問である。この場合霊の実体的把

握が前提となる。ところが霊といっても必ずしも実体的実在的にとらえられるのではなく、むしろ象徴的表現として使われる場合もある。その場合ははじめから「あるかないか」といった議論になじまないのである。この捉え方の違いに注目する必要がある。象徴的理解は思考における抽象能力の練磨度に対応して生じる⁶⁾かにみえる。

「霊」にしる「神」にしる、所詮人間の頭脳が作り出す観念に他ならないから、実際にそんなものが人間の外の世界にいるわけがない。いと信じるから本当にいるような気になるだけで、信じることがその実在性の度をいささかでも増すわけではない。いと信じることは想像力と結びついて実にいろいろなイメージを喚起する。原初の段階では何かを理解しようとすることと信じることは別ものではなかったろう。作られる「観念」はこうあってほしいと思う人間の希望や願望をたっぷり含んでふくれあがる。何よりもその行動、働き方が人間そのものを連想させるものであることは、何ともほほえましく微苦笑をさそわないではない。いきおい人間の現世利益を体言した像になるのも当然である。人間が作る「観念」だから、それが人間的であることは何の不思議もない。ギリシア神話の神々の人間くさを思いおこしてみればいい。「人間的な、あまり人間的な」神々の像ではないか。それと『新約』の神を比べてみれば、人間の思弁能力が進むと「観念」の抽象化が必然的に進行することがよくわかる。

プラトン対話篇に登場するソクラテスの考え方を見てみよう。ソクラテスが「世話」ないし「配慮」の対象とした「靈魂」ないし「魂」がどの程度実体的要素を残しているのかはよくわからない。ただ象徴（シンボル）としての意味が強いことは確かである。「ただ生きるのではなく、よく生きる」ことを追求してはじめて「生きるに値する人生」だとする立場からすると、「魂」とは人間が人間であることの中核、近代以後での「自我」、「自己」に近いニュアンスを含んでいるように感じられる。ただ漫然と生きるのではなく、生きることの目的と根拠とは何かをたえず吟味し検討しつづけることをおいて人間の生はないということであるから、「考える」ことがとりもなおさず「生きる」こと

だということになる。その中心にあるのが「魂」なのであるから、それは人間の身体に自由に出入りする実体とする捉え方とははるかに隔ったものといわざるをえない。たしかにオルペウス教やピュタゴラス派では「肉体はプシュケーをとじこめておく墓場」であるという表現がみられ、牢獄としての肉体が滅んではじめて「魂」が解放されるといった考え方がある。(これが「靈魂不滅説」となる。)そしてプラトンにも類似の表現があることは事実である。しかしそのことによって「魂」を実体的にとらえているとしてはならないだろう。「魂」は人間の生きること存在することのすべてがそれに依拠する唯一の原点のようなものとして構想されている⁷⁾。「自分」という人間はいろいろなものを所有することができる。身体も地位も金も評判や名誉も「自分」のものであっても、主体としての「自分」そのものではない。あらゆるものの根底にある「自分」が「魂」と考えられているのではないか。だから「魂の世話」をすることが即人間の生の最重要課題とされたのである。この場合「魂」は極めて象徴的なとらえ方をされているといえる。そしてこれは先述のホメロスの描くような死者の身体を離れて黄泉の国に下っていく亡霊としての「魂」という捉え方は明らかにちがっている。なぜならそこでは「魂」は死んだ後になってはじめて問題にされるものであって、人間が活着している間に活動する余地は与えられていないからである。従って「魂」が活着している人間のうちにおいて問題にされるようになることは思想の大きな進展といわねばならない。そしてそれはヘラクレスにおいてはっきりとした形で示されたといえる。「魂」は人間の在り方生き方の問題に関わるという文脈で論じられており、「魂」のロゴスによる成長という視点まで入っていることをみれば、それが既に人間存在の「レゾン・デートル」という意味あいを持っていることがわかる。そしてこの時点で「魂」は実体的な側面をほとんど失っており、ソクラテスの捉え方とそう変わらない地点にまで至っているといっても過言ではないだろう。

こういう問題意識の地点から「魂」を問うなら、これが「実在するか否か」という問いかけは意味をなさなくなる。「魂」がないということは人間ではないということになってしまうからである。「魂の世話」を十分しない人間とい

うのは考えられるが、「魂」の全然ない人間を考えることはできないからだ。

「霊」ないし「魂」の象徴的なとらえ方を実体的把握と対照するかたちでみてきた。我々は意外に象徴的、比喩的な意味で「魂」という語を使っているものである。「入魂の仕事」、「大和魂」、「武士の魂」、「魂のピアニスト」といった場合、それらが実体的に考えられているとは想定できない。しかし実際には実体的な把握の方が多数派であろう。その問題点はどこにあるか。実体的にとらえると「霊」が能動的性格を持つことになり、それが主人となる。肉体を離れても存在することができ、自由に肉体のうちに出入りする能力を持ったものとみなされたりすると、人間の肉体などというものは何の主体性もないただの器のようなものになり下がる。もっとひどくなると蔑視の対象にされたりする。(新プラトン派)主人たる「霊」が出ていったまま帰らないのが死であり、抜け殻としての屍には何の意味もないということになる。肉体の上に「霊」をおくことが逆立ちした発想であることは自明で、「霊」は神が与えるものとするキリスト教の霊肉二元論⁸⁾などその典型である。この見方は「霊」を一層神秘的なものにし、単なる「精神活動」以上の者に格上げしようとするにもなる。これは諸悪の根源である「宗教」の考え方とほとんど踵を接するものだからである。これには異議をはさまずにはいられない。

「霊」とか「靈魂」というとどうしても宗教的要素を連想してしまうが、「魂」というとそういう要素なく受けとることができる。そういうニュアンスの差があることは否定できない。それはともかく、世間一般に優勢とみられる「霊」の実体的把握の持つ問題点を吟味してみよう。「靈魂」が「崇る」というようなことを信じる人は少なくない。そうでなくても死んで肉体が消滅した後、「靈魂」は残ると考える人はたくさんいる。では肉体のなくなった後の「靈魂」とはどのようなものなのであろうか。通常はただなんとなく信じているというのが大部分であろうが、中には見てきたように自信たっぷりに断言してはばからない人もいる。単なる漠とした想像であるから何でもありの状況になるわけである。肉体に拘束されない、肉体を「超越」した何かと考えられたりするら

しい。神秘主義のおはこである「超越」という「魔法の杖」が神通力を発揮するのであろうか。肉体が消滅した後も独自に存続しているらしい「それ」とは一体どんなものなのだろうか。どうしてそういうことが可能となっているのか。こういう疑問が当然生じる。神道では人は死ぬと「神」になると考えるらしいが、肉体の亡んだ後に「靈魂」は大きな力を獲得するということなのか、それともそういう力を元々持っているということなのか。肉体という住み家、拠り処などなくても始めから自由自在に動けるものなのか。こんな疑問が生じるのも、「靈魂」は途方もない能力を持っていると考えざるをえないからである。靈感商法でまことしやかにあげられる事例を考えてみればいい。崇っているのは「水子」でも何代か前の大量殺人をした「先祖」でも「変死者」の霊でも何でもいい。この「崇る」という行為を実行している「霊」は生きている人間に災いをもたらす能力があるわけだから、何らかの実体であるのだろうか。現に生きている人間に崇るためには何らかの物理的な影響力を行使できる存在でないとまずい。しかし「霊」は通常姿形をもたないとされる。幽霊のように一定の姿で現われる場合もあるようだが、たいていは「神」のように目には見えないものとされている。まるで透明人間のように狙う相手に悪さができるということである。しかしそのためには「霊」に「意志」があると想定せざるをえない。この憎たらしいやつにとりついてやろうという意欲がなければ、そういう現象は起こりえないからである。いやそれどころかもう一つ問題が出てくる。「靈魂」は不滅とたいてい相場が決まっているから、それまで地上に生まれ死んだ人間の数はいくらかと計算できないほど膨大なはずである。そんな気が遠くなるほど莫大な数の「霊」がどのような場所にどのようにして存在しているというのであろうか。「霊界」といういい方があることから推して、「霊」たちが住まう世界があるとされているのだろう。その世界は特別だから「この世」とは全く別次元のものだとでも逃げるのだろう。それでも全く異次元の世界にいて、どうして「この世」に影響を及ぼすことができるのかという疑問は残る。しかも「この世」には60億を超えるほどの人間がいる。その中からこいつこそ憎らしい標的だと見分ける能力は尋常なものではない。途方もない識

別能力である。地球の反対側にいても相手を間違いなく見つけ方向を間違えずに瞬時に空間移動する能力もいる。そうなると「霊」に全知全能の「神」のような能力があるとでも考えないと話の辻褄が合わなくなる。どういうメカニズムでそんなことが可能になるのか見当もつかない。説明不能である。どうしてこんな「もの」がいるとかあると言えるのであろうか。何かが存在していると「存在証明」することは容易なことではない。昔から手をかえ品をかえなされてきた「神の存在証明」がどれ一つとしてまともなものでないことは、もともと「神」など存在していないのだから無理もない。どんな天才的思弁も「ない」ものを「ある」と証明することはできないからである。それと同様何かが存在していないとする「非存在証明」もむづかしい。実物を見せられるなら、「ほれここにある」といえばすむ話なのだが、それが目に見えないものだとそうはいかない。勿論目に見えないものはないとはいえない。空気は目に見えないからないといえば笑われる。実際「霊」が見えるという人はいる。特別な能力の持主らしく、他の人には見えないものが見えるらしい。「オーラ」が見えるなどという人もいる。ところがその発言が本当だと証明する手だてがない。それが嘘であったり幻覚であったりする可能性は十分あっても、その真偽を確定する手段が全くないのである。嘘か本当か確かめようがないのである。かくして「霊」の問題は、言った者勝ちの「なんでもあり」の世界になってしまっているのである。信じることで安心できるなら事の真偽はどうでもいいとプラグマティックに割り切る態度もありうる。昨今マスコミで喧伝される「心霊ブーム」なるものも中味はほとんどトリックによるインチキにすぎない⁹⁾。にもかかわらずそれを信じる人がなぜこれほどたくさんいるのか。確かにいえることは、実在しているのは人々の「悩み」であって「霊」ではないということである。「悩み」自体はれっきとしてあって、間違っているのはその解決を「霊」といった方向に求めることにある。これは「宗教」の持つ問題点¹⁰⁾に通底するものである。

ここで近年、特に医療や福祉といった領域で重視されるようになった「スピ

リチュアル・ケア」について一瞥しておこう。たとえばホスピスやビハーラでの死が間近に迫った回復の見込みのない人々に対する「ケア」としてこの言葉が使われる。世界で最初にホスピスを作ったシシリー・ソンドースは、人が死ぬ時悔いとか後悔あるいは罪悪感のようなものを残したままではいけないと考えた。彼女はそれを「スピリチュアル・ペイン」と呼んでいる。自責の念や罪の感情などは、結局、「自分が生きていることに何の価値もないのではないか」、「自分には生きる目標が何もないのではないか」という疑念や絶望をもたらさずにはいない。そういう「苦痛」を何とか解き放つ必要がある。身体的苦痛の除去はいうまでもなく必須の問題だが、それだけでは十分ではない。メンタルな面の「苦痛」も除去する必要がある。それが「スピリチュアル・ペイン」なのである。こういう「苦痛」は「どうして自分がこんな目にあわねばならないのか」という怒りの感情にとらわれても、それを誰にぶつけたらいいのかわからない、といったどうしようもない、どこにももっていきようのない苛立ち苦しみである。これを患者が自分だけでとりのぞくことは困難である。その手助けをする者が身近にいる必要がある。それが医師だったり看護師だったりカウンセラーだったり聖職者だったりするのであろう。ボランティアも忘れてはならない。この「苦痛」は身体的なものではないので薬でどうにかするわけにはいかない。生老病死の四苦をあげるまでもなく、仏教では生きることを「苦」とみる世界観がある。この「苦」は「自分の思いどおりにならない」という意味¹¹⁾のようである。カントの幸福の定義の一つである「何でも思いのまま意のままになること」のまさに反対である。死にたくないのに死なねばならないといった苦しみはどうしようもない苦しみである。本人にとってどうしようもない苦しみをはたにいる人間が簡単に取り除けるはずがない。何か手助ができれば、本人の訴えをじっくり「聴く」こと、それに「共感する」ことぐらいしかない。文字通り感情（苦難）を共にする compassion しかないであろう。

そのためのケアの重要性はよくわかる。しかしなぜそれを「スピリチュアル・ケア」と表現せねばならないのか。どうして単なる「メンタル・ケア」で

はいけないのか。「スピリチュアル・ケア」を辞書（『生命倫理事典』）でみると、「広義には、宗教的要素なかでもキリスト教的要素を主体とするケア。狭義には、ホスピスにおける全人的ケアとしてのターミナルケアにあらわれる、キリスト教的世界観に基づくケアを指す。」という定義が与えられている。末期患者の「痛み」は全人的に理解さるべきものであり、「身体的（physical）・社会的（social）・心理的（mental）・靈的（spiritual）要因からなる複合的なもの」とされている。「心理的」と「靈的」が区別されている点は注目に値する。「スピリチュアル・ケア」とは要するに「靈的要因による痛みを和らげる援助」のことなのである。その痛みとは「死に対する恐怖・過去に犯した過ちに対する精神的呵責・地獄や天国の存在や魂が不滅であるか否かをめぐる疑念等、宗教的価値観や死生観に基づく精神的苦悩」である。「魂のケア」としてこういう「苦悩」を和らげる役目を担ってきたのは、欧米では牧師や神父といった聖職者であった。だからこそ「スピリチュアル」が強調されるのである。単なる医療としてのケアなら精神的ケアにすぎず、それを超えたものとして「スピリチュアル・ケア」を位置づけている。心や精神を単なる心理的問題として扱う段階とは一段違ったものとして「靈的」、「スピリチュアル」をとらえること、ここに問題の核心がある。しかしこの点をことさら強調することは「靈的苦悩」は「宗教」によらなければ解決できないという主張につながる。それは体制維持のための保守的イデオロギーとしての「宗教」の持つ大きなマイナス面に目をつぶることになりかねない。こういう「靈的苦悩」は「宗教的なもの」によってしか癒されないものなのであろうか。そこに大きな疑問を感じざるをえない。

このように見てくると「靈」ないし「靈魂」の实在という問題は、「神」の实在という問題と酷似していることがわかる。「靈」は肉体が滅した後も存在しつづけ活動する主体としては、先述のように、認識能力、欲求能力、快・不快の感情をすべて具えた人格的存在でなくてはならないし、過去の気憶もすべてそのまま保持している必要がある。まさに全知全能の存在であることが求め

られる。そして人間に災をなすという悪い面だけでなく、恩恵をほどこすという善い面もかねそなえたものでなくてはならない。なんと「神」そのものに近い存在であることか。従って「霊」や「靈魂」は人間が「神」を作りあげるのと同じ精神構造の生みだす産物であると考えるのが妥当ではあるまいか。

はっきりいって「靈魂」も「神」も疎外現象と思えてならない。疎外とは、機械を発明した人間が機械の奴隷になるように、自分で作ったものが逆に自分の主人になり自分はその奴隷になることである。パソコン、ケータイ、スマホはその好例ではないか。「神」も「靈魂」も人間の頭脳がつむぎだす「観念」である。その「観念」によって支配され隷属状態におかれることによって、人間は本来の人間らしさを喪失してしまう。「ない」ものを「ある」と信じてそれに支配され奴隷になるというほどの愚行がまたとあろうか。

もっとうがった見方をするなら、人間は自分から進んで奴隷になりたがっているのではあるまいか¹²⁾。社会の構造がまた制度そのものが隷属的人間の大量生産をもくろんでいるのではあるまいか。「宗教」もその目的を遂行する装置になっているのではないか。人間は元々自分で主体的に生きようとするよりも、何かに支配されたいがる傾向がある。自由を与えられて何でも自分で主体的に決め実行するいわばしんどい生き方（自律）よりも、自由から逃走（フロム）しようとする楽な道（他律、隷属）の方を好むものではないのか。「靈感商法」でだまされる被害者をみると、我々はなんと無知なとあきれるが、そういう「だまされやすい人間」を社会がつくりたがっているという現実¹³⁾を知らねばならない。「知」は支配する側にだけあればいいのであって、支配される側は余計なことを考えない「従順な羊」であることが望まれているのである。「知」は支配の道具であり、「知識人」のほとんどはそれに奉仕させられている¹⁴⁾。現状はまさにその通りなのだが、そうとは気付かせないようにマスメディア、教育制度を含めてありとあらゆる手段が講じられている。現状がそうになっていることにまず気付くことによる以外突破口はなく、それが先決なのだが、それが限りなく困難になっているのが現実である。嘆息をつかざるをえないが、これがまぎれもない現実なのである。

「スピリチュアル」ということでどうしても考えておかねばならないのは「死後の世界¹⁵⁾」という問題である。「生命」と「いのち」は語感にちがいがあるとする見方があるらしい。「生命」というと、「生まれてから死ぬまでの間」ということで、「いのち」というと「生まれる前」から「死んだ後」まで含むという違いである。そして「死んだら終り」というのではだめで、「いのち」と考えないと「スピリチュアル・ケア」は成り立たないという主張らしい。でも「死んだら終り」で何故いけないのだろうか。そう考える方が生きている間を限りなく貴重な時間とみることができるし、また充実した人生を送ることができるのではないか。エピクロスとともに、死んだら魂もクソもなくすべて終り（無）と考えて生きていくことにしよう。

註

- 1) エピクロス (B.C. 341-271) のあまりにも有名な言葉をあげておこう。「死は我々にとって何ものでもないと考えることに慣れるべきである。というのは善いか悪いかというものはすべて感覚に属するが、死とは感覚のなくなることだからである。」「我々が存在する限り死は現に存在せず、死が現に存在する時には、もはや我々は存在しないからである。」(メノイケウス宛の手紙) 死は無だということがわかれば、不死でありたいなどという空しい願望から解放され、却って人生は楽しいものになるのである。(出・岩崎訳『エピクロス—教説と手紙』(岩波文庫) 参照。
- 2) 安斎育郎『霊はあるか』(講談社ブルーバックス) 25頁参照。これはなかなかすぐれた本で教えられることの多い好著である。
- 3) 柳田国男「先祖の話」(定本 柳田国男集 第10巻 (筑摩書房) 所収。)
- 4) これ以外にも多くの辞書類の世話になったので、以下にそれを記して謝意を表しておく。煩雑となるのを避けるため、その都度書名と頁を記すことはしない。『哲学事典』(平凡社)、『現代倫理学事典』(弘文堂)、『岩波哲学・思想事典』、『生命倫理事典』(太陽出版)、その他。
- 5) 人間の死骸が腐敗して白骨・土灰化するまでを 九段階にわけて描いた『九相寺絵巻』は特に有名である。
- 6) 「神」についても似たような事情がある。『旧約』にみられるように、神も最初は自然に直接働きかけるような物理的能力を発揮する存在として荒々しく描かれているが、後になるとそんなことはだんだんなくなったり影がうすくなってくる傾向がある。自然法則を自由にあやつるような生々しい具体的即物的な存在では、いかにもウソの作り話としか思えなくなるのであり、思考に違和感や矛盾が生じないようにしようとする、いきおい抽象化が進むのではあるまいか。実体的なものとしての表象の非実体化が進行するというこ

とである。

- 7) そこでは「魂」は人間をして真に人間たらしめる「人格の座」といった意味を与えられている。
- 8) デカルトに典型的にみられる心身二元論では、精神と身体が対立概念としてとらえられる。そして精神が身体に優位するものとされる。しかし唯物論的な考え方をとるなら、この「心身問題」は「心」に独自の存在意義を認めず、それを意識というかたちで、つまり身体の機能の生み出す派生的な現象にすぎないとすることになる。筆者も概ねそう考える。
- 9) 安齋前掲書及び中村希明『靈感・霊能の心理学』(朝日文庫) 参照。
- 10) 安齋前掲書(59頁以下)に仏教各宗派に対するアンケート調査の貴重なデータが報告されている。浄土真宗の「霊はいかなる意味においても存在しない」とする見方が一番オーソドックスなものであろう。しかし「霊」の存在を認める宗派もたくさんあり、まさにバラバラで統一性を欠いているのが特徴である。そもそも「霊」の概念規定すら十分でなく、それこそ「何でもありの世界」がここでも出現しているのである。
- 11) 谷山洋三「仏教における死—ビハラの体験から」(『スピリチュアルケアを語る』(関西学院大学出版会) 所収) による。
- 12) 鹿島茂『SとM』(幻冬舎新書) 参照。
- 13) 基本的な疑問を提起することは何より大事である。学校教育は疑問を持つという思考の基本を避けて通ろうとするので、ものを考えない人間を大量生産することになっている。教育制度というものは、所詮、ものを深く考えず、ただいわれたことを従順に守るような、疑うことを知らない人間(ニーチェ的に言えば「畜群」)を「いい人間」とほめて、そうなることを奨励するものようであるから、すぐだまされる人間がたくさんできて何ら不思議ではないとはいえる。支配する側からすればこれほど都合なことはないからである。
- 14) 「西洋キリスト教文化の中に、支配される側の人が、自らの中に支配者の価値観を取り込んでしまい、進んで自らを支配者の扱いやすい存在にしてしまう、そんな手のこんだメカニズムが高度に発達して潜んでいること」を明らかにした、ミッシェル・フーコーはさすがに鋭い。前掲書『スピリチュアルケアを語る』72頁 伊藤高章論文からの引用。
- 15) 死後の世界や死後の生があるとは思わない。怪しげな霊能者がそう語るのなら一笑に付すところだが、ターミナルケア、サナトロジーのパイオニア的存在として知られる、エリザベス・キューブラー・ロスのような人が、「死後の生」を確信をもって語るのをみると、何か断定的に否定し一蹴してしまうのをためらわせるものがある。『死後の真実』伊藤ちぐさ訳(日本教文社)(原題「On Life after Death」)「肉体の死はチョウがマユから出てゆくのと全く同じ」で「仮住いの家からもっと美しい家に移り住むだけのこと」と考えられている。基本的には「肉体は死ぬが精神や靈魂は不死だ」とする典型的なスピリチュアリズムが根底にある。これには全く同意できない。「あなたも死んでみたらわかるよ」といわれれば、その通りというしかないが、死後やはり「世界」はあったということになるのか、やっぱりないのか、生きている限り検証しようがない。どう考えてもそんなものがあるとは思えないのであるが……。